■ひょうごフィールドパビリオン・コンテンツ候補の事例

【但馬牛】香美町小代区

○　概要

明治初期、牛肉を食べる文化が広がると、和牛を枝肉量の多い体格のいい牛にしようと外国種のオス牛を交配に使うようになったが、良質な肉牛は生まれなかった。その中で、残った黒毛和牛の中で、唯一県外の牛を交配しない純血種である但馬牛。現在、全国の黒毛和牛の繁殖メス牛は、99.9%がそのうちの１頭の雄牛「田尻号」を祖先にもつと言われている。

元々田畑を耕すために飼われていた但馬牛は、小柄で小回りがきき、よく働く一方、おとなしい性格である。田植えの時期が終わると、昼間は集落から離れた山の上の放牧場で飼われていた。夏の間、柔らかくて栄養豊富な野草や薬草を食べ、毎日険しい山を行き来することで、足腰の強い健康で丈夫な牛となった。冬には、栄養が少なく堅い稲わらや干し草を与えられ、粗食にも耐えてきた。こうして鍛えられたしなやかな筋肉と、寒さから身を守るための細かな脂肪が入り、霜降り状態の肉質ができる。

兵庫県産の黒毛和種は、但馬牛（たじまうし）とよばれ、兵庫県が指定する種雄牛（県内に 12 頭）のみを歴代に亘り交配し誕生した牛である。この但馬牛（たじまうし）は、食肉である「但馬牛（たじまぎゅう）」のほか、霜降り度合いや歩留まりなど一定の基準を満たしたものを、良質な牛肉の代表である神戸牛、神戸ビーフとして認定している。

○　ひょうごフィールドパビリオンの視点

山間地域の農耕作業において、大切にされてきた但馬牛と一緒に歩んできた暮らしぶりを、住民自らが案内し、訪問者に伝え、体験することにより、他地域にはない特徴をもった地域の魅力を発見し、その地域で暮らすことの誇りへとつなげている。

▲人の生活とともにある但馬牛

▲牛の神様をお祀りする大日堂

▲かつて牛も耕作したうへ山の棚田

▲県立但馬牧場公園（但馬牛博物館）

【アイガモ農法】新温泉町

○　概要

本来、自然界に存在しない除草剤、殺虫剤、殺菌剤、化学肥料などは、農業の生産性を上げてきたが、環境に対しては大きな負荷を与えている。そのため、環境に優しい農業が本質的に持続可能な農業であるとの観点から、自然循環を継続することが大切であり、そのために、アイガモを用いた稲作を行い、捨てるもののない農業の実践に取り組んでいる。

アイガモ農法では、稲作の開始とともに子どものアイガモを放飼する。アイガモは、雑草や害虫を餌として食し、その排泄物が稲の養分となり、化学肥料や農薬を使うことなく病虫害の低減を図ることができる。また、アイガモが泳ぐことにより土が攪拌され、稲の根を刺激して肥料分の吸収が良くなるなど、稲穂の成長を促進する効果がある。アイガモの育成に当たっては、野菜くずを餌として利用するなど資源を再利用するほか、稲作の終了後は、ヌカやワラなどを田に還し、田の中の生態系を維持するとともに、成長したアイガモを鴨肉として食し、余すところなく活用している。

アイガモ以外も、発酵資材、木酢液、酢などの自然資材を利用するほか、大豆、ねぎの無農薬栽培の実践や浜坂の地形を活かした再生可能エネルギーの活用にも取り組む。

○　ひょうごフィールドパビリオンの視点

「捨てるもののない農業」「循環する農業」をあいがも農法を中心に実践し、それを体験する場を提供することにより、持続可能な農業に人を誘い、そのあり方を見て、学び、体験することができる。

▲放飼されたあいがもの子

▲あいがも農法で育った稲穂

▲米ぬか、鴨の糞などを混ぜた堆肥

▲鴨舎を案内するあいがも農法の農家

（※鴨舎以外は、オーガニックファーム　たにぐち HP より）

【播州織】北播磨地域

○　概要

播州織は、寛政 4（1792）年に帰郷した飛田安兵衛が西陣織で習得した技術を生かし、織物を作り始めたことに始まる。西脇を中心とする播磨地域では、昔から温暖な気候を生かした綿花栽培が行われ、各家庭において自給自足で衣類が作られていた。また、加古川・杉原川・野間川など、染色業に適した軟水が豊富で、藍染を中心とした植物染料を用いた織物の生産が行われていた。これらを背景に、織物業が発展してきた。

播州織の最大の特徴は、糸を先に染め、染め上った糸で柄を織る「先染織物」という手法である。たて糸専用のビーム染色と、たて糸・よこ糸の染色に用いられるチーズ染色の 2 種類の染色方法がある。薄手の生地を得意として、様々な色の糸を使用して織り上げることにより、豊かな色彩を持った変化に富んだ布ができる。自然な風合い、豊かな色彩、肌触りの良さが特徴であり、世界でも高く評価され、様々な製品に加工されている。糸染め、機織り、デザイナーによる製品化、販売までが一貫してでき、地域で連携しながら持続可能なまちづくりに取り組んでいる。

○　ひょうごフィールドパビリオンの視点

地域の特徴を活かして発展してきた播州織を、地域全体として支え、情報発信するとともに、オープンファクトリーなどで現場そのものを体験できる仕組みづくりを検討している。また、デザイナーなど若い人材を惹きつける魅力づくりを行い、継続的な発展を続けるチャレンジを続けている。

▲加工処理効果のデモ

▲コワーキングスペース「CONCENT」

▲播州織が購入できる西脇情報未来館 21

▲播州織工房館での機織りの実演